

やと思は来りし程。折しもさうに秋らるる。もこき
 甚ふおとかり。狩同し。さもよや。これ。れ。あ
 ね。む。い。ま。り。か。ん。と。ひ。そ。ま。富。あ。ら
 た。め。南。奉。り。さ。り。以。信。や。此。又。ら。に。行。き。て。人
 も。痘。の。大。う。を。城。し。も。あ。ろ。あ。り。と。候。こ。の
 元。能。厚。き。座。ま。ゆ。い。つ。く。み。を。あ。り。また。の。こ
 を。て。お。後。此。候。を。の。ち。さ。奉。つ。よ。む。を。い。さ。そ。は
 既。さ。ら。は。し。文。政。の。六。年。癸。二。月。の。初。つ。江
 戸。の。大。城。に。ま。あ。り。ゆ。う。清。を。や。ま。は。こ。り。は
 つ。ろ。之。候。に。は。船。小。川。忠。實。清。一。み。て。さ。る。候

護痘錦囊

江戸 石塚汶上尹著

痘ハ多く小兒の時患るもの之ども大人も間々
 之患ふ然るに大人の痘ハおろくち重して人
 事不省よいたる所り故よ小兒ハ勿論大人と
 之ども其調護者病人よありさるる者病人
 痘の大意とあらまへ辨へざらば手ぬけ有べ
 因て者病人の須知とあらまへあるて病家へ

| | |
|------|------|
| 灌膿須知 | 四十葉 |
| 灌膿順證 | 四十二葉 |
| 灌膿險證 | 四十三葉 |
| 灌膿逆證 | 四十七葉 |
| 收靨須知 | 五十葉 |
| 收靨順證 | 五十四葉 |
| 收靨險證 | 五十五葉 |
| 收靨逆證 | 五十九葉 |
| 落痂須知 | 六十二葉 |
| 落痂順證 | 六十三葉 |
| 落痂險證 | 六十四葉 |
| 落痂逆證 | 六十八葉 |
| 婦人出痘 | 七十葉 |
| 妊娠出痘 | 七十二葉 |

護痘錦囊 正編

江戸 石塚汶上尹著

初熱順險逆三證須知

初熱痘の母つゝ熱のいつて痘の轉機第一乃
 初熱の叔又古人轉機毎に順症險症逆症と
 三品に痘の輕重を分つ病態を辨するに三品より
 預め今轉機毎に順險逆三症より抑轉機毎に
 症は也えなくも怖るる事あることありしや
 除て順險逆三症と尋ねべし

初熱 須知

護痘錦囊 正編

一痘熱と傷寒の熱相似り

○眼つらむとみ

○たまひとみ

○痘瘡

傷寒は

○汗を熱せぬ

○傷寒

○寒気ありて熱

痘瘡

○頂脊こむ

但

痘は風寒の症と相違るなり
是ハ外邪と帯るなり

一熱の長短と辨べ

○熱

不吉

但熱ハ二三日にて痘を執るハ大吉

一唇舌と辨べ

○唇舌

善

○唇舌

悪

○霜をうらむと生じ

長豆帛

初熱

須知

二

毒壅 清鮮散
虚弱 温中益氣湯
肝氣 疏肝透毒飲
未明 導赤散

一驚悸并目とひきつけ

○毒壅とて毒の盛るるに由る

○血氣怯弱るるに由る

○平肝生肝氣あるに由る
是六瘧を治すに由る

○目と引つる 吉

○おとろけびやく 吉

○驚発して死するあり

異病の起るるに由る
熱を治すに由る
内服の要するに由る

一熱とひきつけ

○後を引く 少一下劑を利す

一寒戦 ○熱よりあり かんごまの熱
○寒よりあり かんごまの寒

○寒戦 ○本うまをわく熱あり
外は熱を忘るるべし
脾胃の熱を忘るるべし

○寒戦 ○本うまのわく寒あり
外は寒を忘るるべし
大は温補すべし

七日以前
心火亢極上薰肺
孔竅閉塞
治清胃熱

七日以後
陰凝而陽分虚
陰入氣道
主参芪主附

陽明主肌肉其經
走上下齒齦

七日以後

陽陷而陰分虛

陽入血道

治參芪芍苓干姜類

寒戰交牙

成瘵之際虛寒

當行溫補

一 交牙

○熱ふらう有り 〇熱ふらう有り
〇寒ふらう有り 〇寒ふらう有り

〇 交牙

〇本らうまはる多し後有り 胃熱有り
〇本らうまはる少し後有り 脾胃の後有り

〇 交牙

〇本らうまはる多し寒有り 血虚有り
〇本らうまはる少し寒有り 血と補る

〇 寒戦交牙

〇寒戦交牙も初發
熱する久かかずしてかむべし
按ずるに一身表兼痘熱よむと且て表のみならず
あつらひよつて寒戦する且ても後小陽気痘は
後と押むるさ數とあつて久らうす

一 諸失血

- 下血 大小便より血のつ
- 吐血 口のどより血のつ
- 耳目より血のつ
- 鼻血 大凶

吐血耳目より血のつ凶甚なり者大毒瘵の其下
血の解毒先毒重毒を度し一等見止むるす
ありとらへくまのべらうす

〇 氣力

弱ハ寒有り 熱有り

〇 声

高くとらうハ 熱有り
ひまらひさ死ハ 寒有り

又寒戦交牙も七日以前以後の誤りかむらうす
熱症あり熱し屬し寒症あり寒し屬し

又下血と耳目の血の或ハ吐血は比其かろ
鼻血解毒の意本あり傷寒中風是と紅汗と
のそて發汗は比其かろ如く大よ

一 禁物

- 肉食まぐらぐら
てそらひ後熱るる食まぐら
魚鳥の肉
- 餅ろの右もあつて
- あつろけ右もあつて
- 塩ろまぐらの痘中あつて
- 辛まぐらのあつて
- 甘まぐらのあつて
- 酢まぐらのあつて

痘中
いむ事

- 大小便のあつき白
- 房中の淫気
- 蚊の白ひ并煙り
- 糸まぐらろのあつて
- 油と煮まぐらろを并て白
- 酒と酢ろ白
- 麝香の氣 但香氣を發起まぐらと押さへ
- のそあつて大い声
- 痘瘡人の前髪を髪へくのそをいまる
- その外あつき白
或はまぐらろく痘人と驚ろるる

初熱の十二日の定... 初熱の十二日の定... 十二日の數を入... 但てその... 見點てその... 起脹... 灌膿... 初熱... 十二日の數を入... 但てその... 見點てその... 起脹... 灌膿... 初熱... 十二日の數を入... 但てその... 見點てその... 起脹... 灌膿...

初熱 順證

此症療治を加ふるを

痘の十二日の定... 初熱... 十二日の數を入... 但てその... 見點てその... 起脹... 灌膿... 初熱... 十二日の數を入... 但てその... 見點てその... 起脹... 灌膿...

- 初熱の十二日の定
- 初熱
- 十二日の數を入
- 但てその
- 見點てその
- 起脹
- 灌膿
- 初熱
- 十二日の數を入
- 但てその
- 見點てその
- 起脹
- 灌膿

○收靨かせ
身十日かせの初
身十日かせの中
身十日かせの終
右見點身百より
身十二日追を瘡の
定期とす
詳ハ瘡家須知
十條のうちあり

○熱一日はて瘡のり

と毒さうんゆて
氣血よく毒を
制するもあらず
凶

但至てなるは止

○凡熱ハ三日をどめて
瘡のりて熱さむるを美とす

吉

旨不至齊藏

初熱險證

此症療治甚れハ救急とす

○稀つはやく

○吐

たろえすべし

○浮

稀のややくいむべし
急を止る

○口かきく

○からわさかふ且ひえ熱さく

○のんどかきかず

○面あまゑろく

虚寒

○大便さうり或ハ生ゆていづ

○た死やまらぬ

升麻葛根湯
方在卷末下破
之

加減益氣湯
姜煎

初熱ふは症多うくす吐瀉ありとのども
熱あらん痘毒の吐散よりかたなり
此症吐瀉ありて福の多なる胃中虚寒
ゆへともたふはじよるくおだるべし

護散疎通

荆防敗毒散

敗毒和中散
便秘加大黄

○吐つう

○物身のし

○ならのし

○腰のし

○吐

○瀉

○せえ

外邪かろろす
痘毒もあり

毒をまろすべし

宜急散風去痰

清解散

升麻葛根湯

毒壅 清解散

怯弱 温中益氣湯

肝氣 疏肝透毒散

疑似 導赤散

○福つさらんよして目を引つけ

○痰甚しく

○うへこと

○人の見よけき

○むくつたおろく

○惣身福つらうとまうし
あむらのまびんくうごく
たまきんご

○驚愕
あむらのまびんくうごく
あひん 四品あり

○毒壅して毒深きあり

○気血虚弱よりあり

○平素肝気あるにあり
○痘とさあむく又外に名つけがなあり

外風邪そろね

急風邪そろね
痰をまろすべし

升麻葛根湯

加大黃

惡熱涼膈散

實熱

利咽喉
甘吉湯加半

- 唇ひびく
- 舌こげ
- 口かじら
- 耳かゆ
- 眼中くろ目まで赤く
- 大小便通せぬ
- 声とふたりに変まら

是は痘毒咽喉へ入りくづるものなり肺熱が
さすものなりとまらぬとまらぬ本うその時
ゆづりむせのへと通らぬものなり

毒根血中

涼血攻毒散
涼膈散

積熱症

四五日回失下則七日
定変泄瀉而死

四五日
前泄則七月後泄結

熱盛解肌發汗

清解散

毒甚涼血行血
涼血攻毒飲

虚極
当飯補血湯廣東

- 身熱つら
- 腹た
- 眼とら
- 狂気のど
- のんど大きにかさ
- 唇舌たもたひびく
- 諸失血
- 鼻血
- 大便より血の
- 耳目吐血溺血

- 熱盛る
- 毒甚
- 虚極

血熱をさす
下後おさるるの死

吉 是より毒解と
毒盛るる半吉虚ハ凶
大凶
大いふと下
血熱をさす毒を下と
気血温補をへ

○失血諸症をかねてあり

失血の症の由て来るもの其本を治めんと諸症を
かねて毒の毒をせざるより一くその毒を治すと
さんせざる毒の毒を治すと一終其毒を治すと
血を動かし失血の症を治すと

○蛔蟲

○虫と吐瀉

他症あり
他症あり
あり

○紙燭みて痘と見ると

○皮の下
○肉の内
あかみ紅紫
よく見ると

重

壯實者
加味升麻葛根湯

怯弱者
加味多蘇散
表不可過也

麻黄解毒湯

○さびけ

○大後ろ

○げくう

○せたいで

○あそむのう

○さびけつさーひき

○さむけさすぬ

○づかうさすぬ

○あーもあせいでぬ

○のんどかたたき

○熱は五日よくて

痘のいせ
熱る不さぬ

風邪甚

あり
あり

外邪痘毒ときも
あり

初熱逆證

痧症治とがどきとく〜病よ〜

○ 頭面^{かぶ}をよそぬり〜

○ かな^{あせ}青死

○ ひね^{あか}つき上

○ ちくのまそり赤く火の死

○ 眼^めあつ死

○ まぶ^めちたま^ろろ死

○ 眼^めとちろ

○ちにたうまふきた

○こゑ交はふまかしのこゑ

○うき唇舌

○かゝれたまきやく

○胎あう

○ひびこせう

○しん響たうらのこゑはあかしのこゑ

○たう復たう

○たう後いし

○ち腰いし

○あ豆あまのこゑはあまのこゑ

○う膿血うごう

○め目耳鼻あはしのこゑ

○ま斑あしきこゑ

○ま塊いづ

○たたちまちのこゑ

たちまちのこゑ

見點須知

一肌膚善惡

○肌膚

あまやうにうらやひつやある
かたやうにまぶたつやある

凶吉

○指を頬に

○地のゆる白くかたり
指をひけがぬるあかがる
○地のゆるそのまうにて
指をひきてまかすらぬ

凶吉

一見點部位の見方

○面部
○手足

あまやうにうらやひつやある
あまやうにうらやひつやある

逆

○かた
○眼の上 のちよひえ 順 さたふんえ
○眼の下 さたふんえ 逆 のちよひえ

一 痘の形色

形

○丸くまじく
○とんがりそびえ
○ふくまじく
○大つぷる
○うりあま
○ひらくた
○あじあ
○ちのま

色

○明ふらうらみ
○かんのあま
○ほやあ
○痘のあま 地の白き色分る
○本 のまのたふま 貴
○あま のまのたふま 嫌
○うすら
○こびら
○うすま

痘の色

○本 のまのたふま 貴
○あま のまのたふま 嫌

一 痘瘡と水痘の足しけ

○痘瘡

頭面うらんで 熱まげー 風をひかす
あま 野分まげー

○水痘

あま 熱ゆるら 風をひかす
あま 野分まげー

一 痘瘡と麻疹の足しけ

○痘瘡

根肉の内より 根入き あま

○麻疹

この皮の外より 肉のうちに根入

見点

○淡白 氣虚
○過赤 熱毒
○吐瀉 内虚
○便秘 内毒
○汗出如濡 表虚
○肌膚乾枯 表实
右謂六候

見点三日之後未全
出於鮮毒之中宜兼
發散若專寒涼則
痘遲滯不出

一 唇舌

○唇舌 潤
○唇舌 吉

○かきこまをた
○かきこまをた
○かきこまをた
○かきこまをた
○かきこまをた
○かきこまをた
○かきこまをた
○かきこまをた

一 出齋の目あて

○このむら 痘のころ
○このむら 是かてころひとて

このむら 痘のころ 是かてころひとて
このむら 痘のころ 是かてころひとて
このむら 痘のころ 是かてころひとて
このむら 痘のころ 是かてころひとて
このむら 痘のころ 是かてころひとて
このむら 痘のころ 是かてころひとて
このむら 痘のころ 是かてころひとて
このむら 痘のころ 是かてころひとて

一 熱毒盛のめ

見点三々目のもち下剤を用ひて痘毒
を解まべし秘つさめ又補ふべし
まま先達て熱毒解まらぬ本その
時ふいりて毒のめよ氣血分がらるる
なく痘のちつらうして膿十分ふら
べし初めえ氣盛るるを解毒せむ
本そののちたふり氣血熱毒ふら
津液かきこまをた痘毒虚小果して内よ
りの内攻して九日め十日めの頃膿不足
きて痘の山内へ引是は倒壓ふ 大凶也

一 惡痘あくとうも治ちまま見ま所ところありま

惡痘あくとうのあ

一ツニツ紅活あかひでのあ

ええききのまままくくくくくく

凶あやくくも治ちまま

一 身痘みんとうありく

いいくくのあくくのあまままま

眉まゆより上うへ美痘みとう數粒かずりゅうありあり

一 見まありあり初はつ白はくくく紅こうかりかり

唇くちびる赤あか紅こう虚きょありあり

唇くちびる白はくささ

唇くちびる舌した白はくささ

唇くちびる舌した赤あかささ

死しのあららずず

三日さんじつの後のち痘紅紫とうこうしにに変かりり

虚きょなりなり

一 見ま點てん白はくくく水みづのありり

痘とうかりかり

唇くちびる舌した黄わういい

唇くちびる舌した赤あかいい

精神しんじん落おつつずず

痘とう頭かぶへへああせせのありり

頭かぶへへああせせのありり

氣き至しららずず

血ちをを補おふふ

大毒盛おほくとくせい

不治ふじ

涼血攻毒飲

一 大便おほいつつててきき

舌した苔かきありあり

血熱けつねつありあり

毒どくありあり

本ほんううままかかりりててのあららむむ腹はらををここららすすてて痘山とうざんとと上うへぬぬりり見ま点てんのあららむむ血熱けつねつととささままんんべべ

一 疹とさへをひく

疹の直に

○ 大小のろくろの瘧のどた出

夾疹と云

○ わらく紅きむちく

夾疹と云

皮肉のうちにかさふふあり

一 痘數粒して又引

氣分その外別条あり

陽痘と云

疹のうらり

○ 痘惣角へいで色もよく顔色はやくくして

三日目やうとてとらへく引とまある其生之神

母もあらわれば引死と知べうらぶ脈の如く

引とて精神さうさう平生に皆さうさうとて

疹也り痘さう引引引前より必りさ苦むべし

一 痘のでく身熱さるぬ

毒のまじりたるなり
險症よまへ

一 汗のでく痘の色ぐく変む

必死

一 脚氷のどくひやう

きりま下へ行

妨る

一 痘少しくひく

○ 声かきる魚んど

重

○ 声つぎ重ひやうぬ

○ かな目しと瓜のど死

死

○ 口中を死と鼻とつらぬく

死

一痘しうのつらと美びのまのま

○皮かわのすくひひり

二日ふたひのちと大おほのまのま

悪あく氣きにあつたるの
後のちからのことかめりて
死しすべし

一腫物しうぶつ

○かれてのまね

痘しうのつら重おも

痘しうのつら有ありの
死しすべし

一紫むらのちを吐く

不ふ治ちといふもと尽くまるます

○唇ちゆ舌かたのつらひ

遺い毒どくといふもの毒と受てまじと

○痘しう形かたち色いろのつら

是こゝ内うち毒どくのつら解とけす

不ふ凶こう

○舌かた苦くありて熱のつら属ぞくへ

大おほ黄おう世せ硝せう大おほ共とものつら

一賊痘ぞくしう

○ここびびんんのつら痘しう粒つぶのつら

賊ぞく痘しうといふ

山やまを上て勢のつらひひく

毒どくのつらと引きつむ

一喉のどのつら痘しう多おほき

纏てん喉のどといふ

○早はやのつら毒どくとまじとすべしとすべしとすべし

本もとのつら中ちゆう頃けいのつら湯ゆ水みづにひびきび
食け餌じのつらと通らす初はつ三さん四し日にちのつらち
三さん四し日にちのつらち
療りやう治ちます一いちちのつらと通らす初はつ三さん四し日にちのつらち
かかのつらと通らす初はつ三さん四し日にちのつらち

射干鼠粘子湯

又また加か下げ薬やく

夕ゆふ麥ま清せい補ぼ湯とう

咽のど 通と飲ん食じ如に居ゐ
喉のど 通と氣き如に居ゐ
之の前まへ

見點 須知 十八

痘の初めて刀あり

日を見點といふ

是は外をさうさう十

二日のうち即ち下ふ

日と定む即ち下ふ

幾日めといふは

目よりさうさう此

日を倍する左の通り

身一日

でさうひのたう

身二日

でさうひのたう

此身三日を医書に

出齊といふ

見點順證

此症をとりて服さざるとあつ

熱三四日にして

氣血盛 かつ

痘見えて

顔の色あざあ

眼中あざあ

唇舌うらわす

痘ニツツあちくあちくあ

吉

色あちくあちく

大小あちく王のごとくあ

但ニツツあちくあ

吉

旨不至齋藏

一熱あつ一日あつひ或半日あつひ中ちゆうて
痘たうのしづりつる
氣血きけつ怯弱けつじやく中ちゆうて
毒どくのしづりつる
痘たう密ひそ

一四五日よちご中ちゆうて痘たうのしづりつる
餘症よしづ多く平生へいぜい躰たうにしづりつる
豆まめのしづりつる
至いたてかるし

十神解毒湯
加大黄

涼血行血兼散
十神解毒湯
加散

前方
加大黄紫根牛房
連翹

見點險證
此証こし毒どくのしづりつる

此証こし毒どくのしづりつる

○身熱しんねつささららず

毒どくのしづりつる
血熱ちけつささららず

○唇くちびる古赤こせき

血熱ちけつささららず

○大便だいべん通つうず

毒どくのしづりつる

○痘たうのしづりつる

外寒がいふせと熱ねつのしづりつる

血熱ちけつささららず

○古黄こわう黒くろ

同

○痘たうのしづりつる

○身熱しんねつささららず

○肌肉きくうとしづりつる

でんりひ 險證

清血解毒
十神解毒湯
清毒活血湯
便秘加大黄

肝肺胃火炆

清血攻毒飲

- 頭焦黒き色をふくむ
- 瘡紅紫よりのもの
- うのここと
- 大熱やまぬ

血分毒さへ

○咽のつと

○眼あつた

○唇をま

○耳火のてい

○瘡 高くとびえ つやうつ

○瘡 色うらむ ナまやぐ

きき 清熱いさす
きき 血まらさす
七八日の内鼻血出

凶

清涼攻毒飲

涼血攻毒飲
遅則難及
血熱軽者
十神解毒湯
加枳殼玄明粉

- 山あが
- 色むらさかたうらひつやあり
- りごえうらむ狂気の如く
- のねど
- 口かた
- 唇舌かたをまき苔あつ
- 顔色がたをまきまけいろ
- 面眼火のこく
- 半豆水のこく
- 大便のこく
- 小便のこく
- 唇舌紫紅苔まかくたひこれ

血熱さへ 毒も甚う

毒血中あり

補氣托瘡
固陽散火湯

○熱さるゑ

○氣さるゑ

○痘の根ひきたず

○肉腫ひつる

け澄早く表と固し火熱と散ぶべし
紅さるゑは表虚して皮うすく
かせりいり内攻して死

○内くらく

毒裏あり

毒と解
血とあぐるべし

○外くらく

毒表あり

毒と解

清毒活血湯

升麻葛根湯

清涼攻毒飲

渴 補益氣湯加麥
不渴 温中益氣湯

人多飯莩湯
十全大補湯
遲則痒塌而死

温中益氣湯
大保元湯

○痘いぼで快こころかるぬ

○大便だいべん秘ひと

○大便だいべんとろ

○とろて

内うちに実じつ熱ねつあり
内うち虚きょ 下利げりして
内うち虚きょ 津液しんえきとろ

○色いろ白しろく

皮かわうすくして

根ねうすくして紅あかさる

表うへの固こさ
裏うらと温補おんぽとへ

○痘いぼ白しろく

山やまあけて手てうすくさる

虚

○根ねうすくして死し

○後のちまきまきかへつて涼ひやさる

大温補氣血

木香散
異功散

加減益氣湯

○身まごりく

○痘まろく

○唇舌あまく白く

○たれ

○たらしごり或水ごり

○牛豆種まき

○痘の根のまき赤うして

○山あがせ

○色白く

○肌うるわらず

○飲食あひくひひ

○大便ごり

○のんどかさね

氣血虚

氣虚

神效散

射干鼠粘子湯
六日後
多麥清補湯
首尾甘湯俣

○痘おりのとんども

○根のまきりくく

○むごひましら

○くちくま

○色紅まき

○胸ま痘多き

○喉ま痘多き

は志八九日のころ痘毒のしどよまのしど
まかりのしどひのさきまのにならうぬやう
たきくは目のうちまてにまあてまて
ふごり六見点須知り負あ

針後四聖膏貼之

○頭上づまうの數粒まがりをあらわ 免毒瘡いどくそうとふ

このうち一粒大なりかき
是の毒針をさすりふまるとつけかせの後つひ
ふまるとのまづ一をさすり免毒數粒よりさす
血氣うまむ外の瘡をさす

○一たびの熱

頭面づめんの中大瘡數点出

外の瘡そらのでぞ

熱ねつさくらぬ

急以鍼鋒排破
使爛洩毒
急與涼血攻毒劑

是ハやく針めてほきまづる一まはば
血氣とさぬべ

十全大補湯

○白瘡しろそう

○粉こなをわらうくつてこめて

根通ねとおりままりあり

○山やまハ上あてもまをらうふま

氣血虛

○寒戦さむかひ 交牙まぎまがり

○七日ななひ 以前まへハ 熱

○七日ななひ 以後あとのちハ 寒

發熱須知はつねつしゆち

瘡赤そうあかくかた死しるま

○腹はらのこ

毒をくぐせ

○大便おんのぬ

瘡のこ

敗毒和中散
清熱解毒湯
俱加大黃

腸胃穢濁泉毒
十神解毒湯
加大黃石膏

痘疹の毒
○火熱のまじりたる痘

- かみおのり
- 眉と眉の間
- たるむら
- わらわらと

痘疹の毒
内に毒体と
くまき

見點逆證

痘疹の毒
は症瘰癧とがすもりとも
こくくすくすく

○豆の甚しき死

たれちまら熱いので忽えに忽ちとらふ
或熱半日或一日にてカある

- 痘いどく
- 大熱中身ぬ
- たれちまらぬ
- くごりやまぬ
- ふつふつやまぬ
- たれちまらぬ
- うらぐらやまぬ

○わびえんくさすぬ
 ○むちあうにじりうたふたふた
 ○ひくつ死すぬ
 ○あざろきすぬ
 ○人の見よけり死すぬ
 ○ひきつひ せろろとすぬ
 ○精神もて狂気のごと
 ○腰もろ
 ○腰もろ
 ○腹もろ
 ○脚もろと立夏あひまろ

○づう
 ○頭もろ
 ○面もろ
 ○面青き
 ○頭あざろとひあろ
 ○目もろ
 ○口もろ
 ○唇の両もろと血もろ
 ○声もろと唾のごと
 ○たんざろくせろろ
 ○ひもろと死ごむとさろろと悪

○痘以前腫物を患

○痘

- ちりもかきもろ死
- ひらびく牛もろ死
- 形かきまゝくしんもろ死
- あじあろ
- 麩のど死
- 目ろろのど死
- 汗のど死
- あけのど死

一日紅点如蚊咬者非痘

乃毒盛為風寒所逼不能發越宜用敗毒散使表清熱退身涼紅点自出

皮肉中壘々紅点稠密

以薄荷湯調退火散服之

以牛房子末敷額門上以散熱毒

此非独能使痘稀又且免毒侵眼

- 湯玉のど死
- のろひ蚊咬のど死
- かこの種のど死
- へびのぬげからのど死
- みえのかまのど死
- 皮のうちよかまのど死
- いでく又かまのど死
- 出そろのぬ
- かどたうまのど死
- あくどくあろ死
- 灰のどく白き

- 皮のしつこくすた
- 皮のまじく紅く潤あまじすかまをた
- 根の紅き血色とちつこ
- 根の紅きまろくをた
- 山を引く
- 山のくまを中針の穴の如黒く点有
- 手足先よで頭面あまをた
- 眉以上まろ赤紫の点つ
- 腰より以下瘡をた上見えぬ
- まろのちつこ
- 泡のどたのつ

- 塊^{かたまり}ゆ
 - 瘡^{かさ}疹^{しん}をまろ
 - 舌の上瘡うづたうかまろ
 - 舌のうらわめて瘡をた
 - 唇舌へまろに多く
 - 胸^{むね}の前^{まえ}多く
 - 眼^めもち多く
- かまろのちつこで地腫れをたてまろをたて
 まろ眼をたてあまをたて眼の中
 かまろをたて止まるとはまろをたて
 六十二丁

○肩と脊とよ多き

肩と脊とよ多き
肩は肉井の穴あり肩井肉中水乃暗行
の地とてあのかよ所るは六は所は瘡多れ
あの方とまらるあ
背五臟六腑のころ所るは六は地瘡多け
は六は條の氣結せ

○臍の内

二三粒ハ
四五粒ハ

○一粒別して大きくひろかぞれ

少一時々らうして引こむ
臍瘡

○一粒きらめて大く

赤きものころて赤き
針めてつき
かぶるべし

治法

清涼解毒

使痘易長

清涼則

無血熱枯燥之患

解毒則

無雍滯黑陷之患

是大法也

常者 可必

変者 不可必

起脹須知

一 頃症とくく具らびとるども面部のち
一 粒う二粒美く水を持らるあ且バ 吉
一 微熱ある
起脹の常候

てそらひとる身體とて一きとて一とて
た一毒の表のつらあは牙體とらるげは
あうこのたは見点とら毒の表へのであはりて
えきの瘡毒をば濃くするきんとするあは
微熱のつらとて自然あはるべき病とてあ候
とす

○全熱気るだハ

元氣不足 瘡をこわがし 不善

一轉機あの甚おそろた多た死し 吉ふあ

是ら表虚毒盛るのわらふかた地れ
引での内へ引くは多くは病うへんは
る
但いろてかろた病は例ふあふ妨る

一假脹あ

○瘰癧あのきつやうと人のども
指めておせがくちふあま

凶

紙そめてかすは
内へくるとたどやと溜理のどた
是ら假脹又空觀喜のふ急は表れぬ
遅るは痒みを生か山にて死す

方可見險症

一瘰癧あ黄土の色のごとく神彩ある凶

是と假脹との神彩ありの真脹也

○神彩あ ○神彩あ
瘰癧あよりあつて中ご

一眼あを鼻あとさがる

○五六日あ 眼あ閉あ 吉とて

○五六日追 眼あ不あ閉あ あ—但あろた

但眼封あと甚あくは壓後眼疾を病

○眼あ ○まあんあづあづあ 吉
○まあちあほあぬあ 凶

起脹 須知

一下劑

毒盛る且つおもてもあつこの中まじり
下まじりもありあつこの後まじり毒あま
どもねらこの妨とつるあつ下劑めらるべ
かすずるまじりもたまつ下劑のあく
毒あつ本らこの毒に足えり

一衣類

- 五日前の常のど
- 五日以後のほく暖よま

一禁物

瘡の虚実軽重よりつらむぎの食せ
ぎのあつ

- あつらひ
- あつらひ
- 魚
- 酒
- 白
- 極
- 山あひぬ
- 大実
- 瘡軽
- 瘡重

解らにてあつ
白酒とのま

一虫ハのかねらう

○初熱ハ 妨ハ 妨ハ
 ○水ハのまらう 妨ハ

一虫ハのうらひ

○からあてたたままぬ
 ○たれたらうのまらうとむらたたらう
 ○たれたらう
 ○さびけいあうと熱あう
 寒熱ハまらう

○虫ハと吐ハた

死ハ 十ハ二三吉
 生ハ 九ハ死ハ一ハ生ハ

見点より牙四日め

なり

牙四日を倍

水ハの初ハ

牙五

水ハの中ハ

牙六日

水ハのあまみ

牙六日を医書ハ

蒸長ハ

起脹ハ頃證ハ

は赤茶とやきすと自ら

○先ハのうらひ後ハだんくハうらひ

○瘡ハの根ハのまらう紅ハくまらう

○山ハくくどらうくハなにからう

○かたえんくハと地ハをまらう

頃吉

○眼ハもぐんくハとたま

○飲食常ハのどく

○大便常ハのどく

○四五日ハて

餘症ハく平生ハ射ハて

うらひ

痘豆ハのどく

起脹險證 此症亦由氣滯所致

○瘰癧紅紫小疔

熱火の毒

瘰癧の毒を消す

○瘰癧の頂紅紫小疔

山崎の毒

瘰癧の毒を消す

○山崎あがり疔

かまの毒

山崎の毒を消す

○山あがり疔

かまの毒

山あがりの毒を消す

○形疔

かまの毒

形疔の毒を消す

清涼攻毒飲

方在卷末下做之

清毒活血湯

四物湯

如入多麥門骨皮
外用胭脂塗法

清毒活血湯

四物湯加多麥骨皮

保元湯

○^ろ紅くうらひ
形ひらへ

血有餘
氣不豆

氣を補へ

十全大補湯

○形ひらへ
かまへ

氣血不豆

大氣血を補へ

加減益氣湯
大保元湯

○形ひらへ
かまへ

氣虛

益氣を補へ

袖效散加黄芩

○^ろかまへ
かまへ

血不豆

血を補へ

清毒活血湯去多
辰砂益之散 兼用
冷水下

○^ろかまへ
かまへ

血熱

血を補へ

前方 兼用同

○^ろかまへ
かまへ

血熱

右の同

清毒活血湯

○形板のどく
ひらへ

血滯

毒解さす

大保元湯

○かまへ
かまへ

氣虚弱
毒をさす

同方

○^ろかまへ
かまへ

氣不豆
兼黄痘と

急攻散

實氣飲和葉汁
兼與奪命丹
不則漸変黒点

○^ろかまへ
かまへ

鬼痘と

辛涼解肌

桂枝葛根湯

○^ろかまへ
かまへ

肌甚か
毒をさす

錢氏白朮散
去葛根加生薑

脾胃虛也

涼血補氣

血餘也

人參敗毒湯

○ 紅く臭く
指小ておせむらう

血餘也

不則後必痒塌而死

前方

○ 瘡のかさむらう

使氣血交會方能
化毒成漿

○ 瘡のかさむらう
軽ハ 重ハ

大保元之類

○ 山吹上り

提氣実腹

○ 皮膚のうらみ

不則十二日必不能
回謝不收結而死

○ 瘡のさしたる

大温補氣血托裏救表

○ 汗やうらみ

多岐履茸湯加生薑

○ 根のひら

不則八九日間痒塌
十二日為内攻痰喘

○ 根のひら

氣急死

○ 紙燭を照して

右と同

潔古白花蛇散

○ 寒戦

龍眼肉酒温服

○ 交牙

腎氣の衰へ

瘡のさしたる

○ 初熱の時

熱毒を毒脾胃

○ あらうの時

脾胃の熱毒

○ 本うらうの時

瘡のさしたる

○痘疹んくひらてくま
かろくらんく紅腫

虚実二種あり

○虚
○赤白
○赤赤

温補とぞ

○實
○赤赤
○赤赤

経つたさぬ
毒を解と

○痘疹の牛乳と少痘疹の出
是公賜痘疹の

毒盛るとぞ
内毒とくく

○賜痘
あつて

最重
内毒とくく
毒を解と

○痘疹のよふて
痘疹ひきこむ

内毒とくく

内托散
加穿山甲強蚕
托裏劑
兼與安神丸

發毒

加曲麥

○食傷して痘疹の
後とや或はひき

脾胃の氣うま

發表兼燥濕
内托散

○兩方よりあて痘疹の

表
あつたうま

錢氏白朮散
加風芷

○形多
あつて

氣不固
あつたうま

參芪内托散
外禁煎棗

○様不降
ひらてくま

内毒をよむ
外悪を解と

清熱解毒湯

○旧來症物あつて愈
ぬ

凶多

内托散去毒加穿山

○熱あま
○熱毒さま

経つたさぬ
内毒とくく

保元湯
加糯米圭丁

上日不至齋藏

○瘡ぢうのぢて

ちひさた穴あなあり

蛭瘡ぢう

肉にくのちひさた

肌はだのちひさたあり
たしええ氣きなり
瘡ぢうありとあり
急きう補おぎなへ

起脹逆證

は瘡瘡ぢうぢう治ちかどとあり
こしとく接せぎす

○瘡ぢう勢せい身み盛さかりて頭面づめん山やま谷やま上うへぬ

○瘡ぢうでんくよひまてんえぬ

○五ご六ろく日にちよひあつておそろそぬ

○引ひこみ穴あなあれて針はりの穴あなのぢた

○黒くろくしむらぬどくかた

○山やまあびたひらいた

○あそめしむらぬかた

○あそめしむらぬかた

○寒けつらひ

○をだま

○息まじ

○あはゆる血のづら

○のんどかまじをたすふ湯あそひ

○こんのんどめてせらつぎまじ甚

○晝夜啼てまじ

○櫻のまじ

○復のまじ

○中まじ

○まじ

○唇舌

○かまじ

○ひまじ

○世刺まじ

ひまじ下削めて

白黄赤焦
黒赤

まじらのまじ

○水泡

○血泡

○塊

○丹毒

○丹疹

瘡癩の目まじを風わろのまじ

まじのかまじ肉中まじ

赤くむら雲のまじ肉中まじ

まじ風わろのまじ

○諸失血

- 目より血のり
- 口より血のり
- 耳より血のり
- 鼻より血のり
- 大小便より血のり

但

実毒壅滞ハ失血より毒解トモあり
是ゆて死症も重きハ多むトモあり

凶 凶 凶
妨る
甚ハ凶
虚症ハ凶

治法

七日 托裏排膿
八日

温補気血使痘
易成膿

是大法也

常者可必

変者不可必

○毒未及解

干温補中兼解毒
若偏燥則毒盛
不能化膿

灌膿須知

一 微熱のり

本膿の常候

是元気の毒を吐して
膿化せしむる

一 声ひくるる

本膿の常候

是のんど痘を故り

一 痘のり

元々の常候

痘のたつと表毒とく
出るあり

一 痘のり

一 地たる

七日目まで一えのまのり腮の下迄たまる

一 かの甚早き

凶

毒熱を痘をかり解
毒内へしむる

但のろてかるるハ妨る

一六日の後

あまをら膿を見へ

○膿あふ

生

毒化しとうまらるる

○膿あふ

死

毒うららる外去路なく
内攻とらるる

一膿色

○黄いやありして
○つやなく黄土のごとく

凶吉

一痘の根

○紅くはして
○紅むらとちり

凶吉

一痘の皮

○厚くかたらかよして
○うまらかよして

凶吉

一皮

内水

七日ゆめひ

凶

膿うららぬ

瘡うららぬ

但當生む九日とまらぬ七日ゆめひにては

一頭面膿

死すまぬか

手豆うららぬ

一手豆膿

死すまぬか

頭面うららぬ

一

声とららるる

肘膝に必疔毒あふ
疔のと續編

一 中ぶじちんやうに付くはるん

- 額ひん
- 鼻準びんじゆん
- 頰かほ
- 印堂いんどう

此高たどろかど多は五臓の毒気
のいそぎ平たかど母と此地やう
は外の出のものをさるゆゑや
さうやう気かつて

一 禁物きんぶつ

- ぬちぬち
- ぬち米ぬちまいのぬち
- たまごたまご
- たいたい

- たまごたまご
- こころこころあまの
- たいたいさうさうの

虚證ハ
たのみの母
あまの
實症ハ
あ
きんかつへい
虚實平三症やあ

見點けんてんろ第七日め
る

- 第七日め倍ばい
- 第だい八日
- 第だい九日
- 第だい九日めと医書に
漿満じやうまんと云

灌膿くわんぬ順證じゆんてい

此症療治せざてあづらひ

- 痘たうの根紅ねあかく糸いとめてくろくろく如ごとく
- 痘たうのいせだいせだ白くへんど
- 膿うみあつらと手てあつくえ
- 痘たうい
- 少すく熱ねつあり
- 氣きさたさうやう
- 飲食いんじきさく
- 大小便常たうせうべんつねのてた

吉

一痘の少く

○四五日して平生舐めて
血豆のどく

○五六日して

うらうらむらむら

血腫痘といふ

のりてかろ

但 痘多きはゆがみさうらむらむら
是ハ險證ふそ

灌膿險證

ハ赤くせりながら白く
まじりて

○回意太早き

ハ

膿とのりやうまもかせりかろるんて
いそがしく地を引是毒内へ引る是と
倒膿といふ凶

但 膿を多しものりてかろるハ妨るゝといふも
降くあつものりて

○痘の色をひのどく白く

瘡ちりて

膿

○寒戦
○交牙
此二種下あり

内托散之類
回陽返本湯
或多莖鹿茸湯
建中湯
方在蒼朮下俵之

回陽返本湯

寒戦交牙
異功散
又建中湯

○寒戦
○交牙

十二日のぼかると山瘧
十四日多く死せしむる
是れ死を告ぐ

○水うそつやよく
たせきするふ
女らうううして皮しきりある

元氣不足して
おのまごりた

唇舌淡紅

十全大補湯
小腹鳴
前方加丁姜

○唇舌色うす死
○下をらうなる

大便利
前方加附五分

○大便ゆるる

○膿半のち色るまろく
大便ゆるりから

十全大補湯加附
若誤用犀角地
黄湯謬人

○失血とがぬ
下血
吐血

氣血不足あり
大氣血を補す

異功散
建中湯
七味荳蔻丸
一粒金丹

○膿半のちて
瘡のてんぐやま

脾胃の寒有り

異功散

不及則多附兼用
又翁氏一粒金丹
服後須更

○大便ゆるまろく
下をらうる

脾胃虚寒
氣虚甚

安睡
舌紅潤
吉

○瘡あききひひたるごとく
是肌肉なきと爛あり

凶

千金内托散
加丁穿山甲

○瘡白うして水晶のごとく
内は膿るた

治がごと

々鹿茸湯
前方奏功則復起充
灌空処出贈痘此痘
雖小細易灌易面是
餘毒得復出吉兆也

内十全大補湯加荊
風車
敗草散
象牙散
松花散
赤豆水
蕎麥粉
外

○痘あらく白く

根通入血の紅もちり

気血虚甚

大いなる毒

○大補ふて

是れ氣血を志なり補入肉より毒を去らせ
ふこひうまるとあり痘と瘰のあひの
はる間へ強瘰とのひて小した瘰とて
はでのの小とらふまらうまらうまら
又かせやう瘰毒まきしんべー 吉兆

○でのめ

つるはは

膿水かきぬ

内 行氣血と補ひ
小便を導

外 かきぬまら

毒壅於内

驗唇舌微刺之
唇舌滋润忌下

七八日

○大便のどぞ

膿のこぼる

○九日十日のうて大便のどぞ且つかせの後
瘰うらひひききて 死

毒深く
唇舌乾苦 ぐら

○痘かまじ

坑をうら

内攻あり

いさしく之所より毒をばつたれニそ所
大なる毒をうら

凶

清涼攻毒飲

血症
涼血攻毒飲

○のど甚うい

○大便數日通せぬ

○唇舌かたき苔黒く

○血症。下血。吐血。とる血

はらう
血脈をさるまら

十神解毒湯加減

夕麥清補湯
九味神効散
甘吉湯加牛
撰用

壯脾氣利皮膚之
水
四君子湯合之飲
加風芷

毒陷標干上死兇

毒陷標干下死兇

言不至齋藏

○痘のしむ

○あまみで実して痛ハ

○紅いあまみで

○紅いあまみで

膿のしむ

○紅いあまみで

かきこえ死黒痛ハ

同

同

治まるふかきと
血熱をさす

○口かた死

○のどえしむ

○むせび

○せりくせりく

痘のしむ
あまみ

○泡

風あまみあせのど
大なる火をさすのど

皮膚あつたあまみ

○大サむろのど死

皮膚の溼甚し不治

○かにから膿をのち

○半豆うまみぬ

○半豆膿をのち

かにから膿をのち

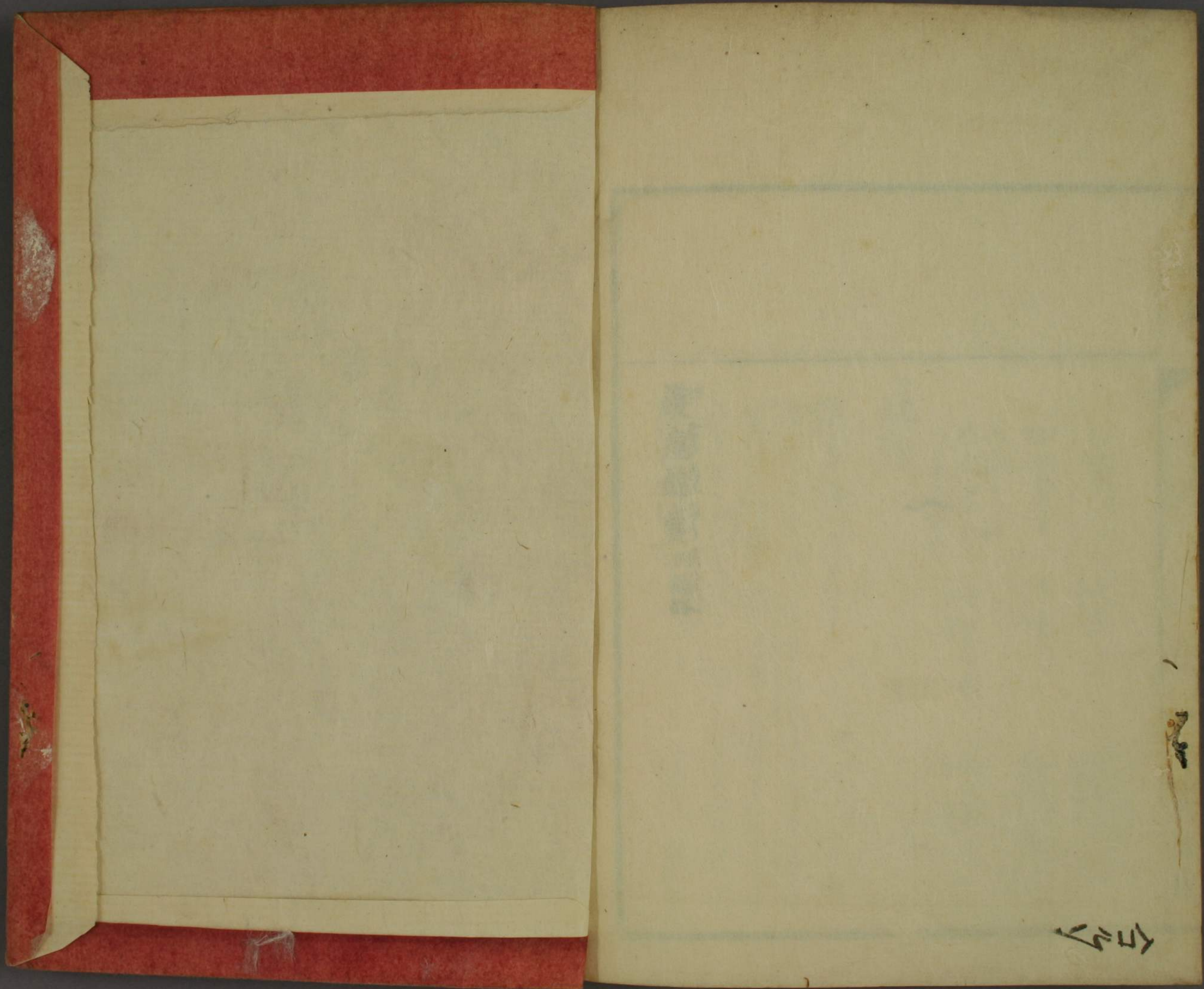
○頬

○鼻準

額

○年壽

は高死研敷い五條の毒気集るま
母に破て氣のま外の痘好ひ
肉皮とままぬるを



全

- 吐くくうくうすくう死
- 腹るる
- 腹いむ
- 由水とのめ直よたらなる
- 時々口をとる
- 吐くくくくくくくくく
- かうるく死
- 聲耳つふまておのど死
- 舌やくり
- 口中のりくくくくく
- 百頭腫て大きくう

- 手豆ひえくくく
- たらんく
- 唇く白くかすのどたのめと生さる
- 膿血のく
- 走馬牙疳くくく
- 痘
- 紅くむく死
- かえうく
- 肉くひくく山くあびぬ
- 皮膚くかいたくくくくく
- 皮あつくくくくくく

○濃る死

○濃も水もまじ

○内清水とあぐ

外ハ黄土の色ので死

○かまろりした水けひきろも死

○くろく引こむ

○くろく引こむ

○今く引こむ深く死

○まん中黒く引こむ

まろりのつぎ上アサる

○まん中うまるといふ死

まろりかした引て色黒き

○泡 かちあまので死

○かろうち

○かろうち

○かろうち

水のでき

まあふ血

むらあ血

かまき

同く

かまき

痘

○針の穴のどく死

うま又水のどく

○まろり山とあびて

まん中くむ

○清やあけて

形ら大工こえて

内ぬ水もろくからる

かまき

○ 汗や少くもまじく
色やとろくろ

○ かきかきりて
色よく血まじり

○ かきかきりて
血も水もまじく
色紫或はくろ死

かせころえ
收靨須知

一 微熱いづろ
但ともろくろ

一 微のいどかじく
但ともろくろ

一 微かむいづろ
但甚くまじあ

一 微臭
但ともろくろ

右常候いづれもかせんとて陽氣膿とむ
かころいふあり

かせの附
常候

かせの附
常候

かせの附
常候

かせの附
常候

かせの附
常候

一 眼ひらく事

○十二日目と定まると

○十二日前 ひらく

○十二日後 ひらかぬ

但 かりた眼は十二日の定ハ重なり

ひらきまわ

一 收醫甚たむ

上 約 險 症 あり

一 一時かせ一時の間

先 近 あり

一 痘稀少して

大吉

併 毒 の ころ 險 症 あり

一 火けありのすずりのころ

は 時 生 きの ころ あり

○唇舌潤

○声きこく

○のしどま〜く 生

○飲食まき

○大小便常のころ

○唇舌かたむ 苦 あり

○声つぎま

○のしどま〜

○飲食まき

○大小便

死

補脾滲濕

一 半かせて大便

さぬ びら

かせ半時 陽気内へかゝるころ 本ころ ころ 陽気表へいづる 時と大いことあり

一 かせらる順

- 一身ハ 顔より胸腹背手足
- 顔ハ 口吻鼻頰眉より上
- 手足ハ 指のきたてのひら 足のうら
- 額と足 地をたへ妨る
- 鼻染上 まづかせらる 凶るまづも先せず

一 面部いまご膿むす

鼻染上まづかせらる
 是脾経の毒伏して發せざるなり

一 收

いりて早き
 又血鬻瘡をいりてかろたあり
 凶急に解毒まづ

一 二時の間にかせ一時の間にかせらる

- 声つぎまづ坤のどく
- いりてさうど
- のんどせまづ
- 食ふまぬ
 は症かるる膿不豆るり
- 大いなる癰たあままづ 生べ

忍冬解毒湯
大連翹飲

血壓痘けつえんとう

一痘ひとつとういりて稀少まじく

四五日にして

○豆まめのごころり

五百一にて

○血ち少すくてかせ

八九日にて

○痂かさ母ははちり

かみぐく

是こゝの血ちさうして毒どく少すくくして膿うみうるべ

てかせ

是こゝと血ち壓えん痘とうとの

空あか症しやう多おほく十じゅうが九くッ餘あま毒どくあるものうかせ

脾胃いと補おぎなひ解毒げどくまで

一禁物きんぶつ

虚実きょじつをかせうかしていり

○ゆちり

○油あぶらけり

○魚うい鳥とりり

○たまご

○酒さけり

但ただあまぎけり

○志こゝろ不ふかきもの

右
○軽かろい
○重おもい
○百ひゃく日にち或ある一いち年ねんもむ
○痂かさ落おちる身みでいむ

見點第十日め

弟十日と倍

かせの初

弟十日

かせの中

弟十二日

かせの志すひ

弟十二日医書に

結茹とのふ

此十二日と

十二日の定め

医者のかま

にありさ

さくもの賀

よび候

かせ 収斂順證

は症れらせす

○身ぞんくとかろく

○たまぞんくとひま

○眼少一づひらまかり

○飲食常のてく

○大小便常のてく

○上より下へ前後追々かせ

○少く熱い

○少くかろい

○まことあひあ

○痘しういりて少すくく

且あちやくして

うまよるるす

五六日にて

かせる

但しう痘しうあつたふもいふくす

らりてなり

かせ 險證

瘰癧れいぢのあつたふもいふくす

除濕湯
保嬰百補湯倍木木
加風蒼

方在卷末下倣之

大連堯飲

○水みづのどに膿うみ流ながしてかす

○たぐまてかすぬ

小使せうしと通とじ

是この膿うみ表へとまじりて一いっ表へよりりるた
るり又また水みづと汗あせ山のまて皮層ひふへあつたかじ
かぬる

除濕湯

○たぐまてかせぬ

色いろるま白しろき

小使せうしと通とじ

是こら十三四じゅうさんしよ目めまで又また膿うみとあつて

汪氏解毒飲
煩渴加五麥

汪氏解毒飲
加苓連

○膿汁からず

○身熱あり

○よく食せり

○爛て痛甚き

是れ毒物の食せり

毒と解し
少く補ふ

○痘の形色

烟一ふまをうつころと死

は付死と生との二道あり

○飲食常のどく

○二便常のどく

○氣さたふ

吉 是れ及まらぬ凶
ふく六須知あり

○鼻滌上

先かた

凶とのいふも死せず

○面部の膿とのかず

先鼻滌上かたせり

是れ脾経の毒依りてのびざり

死

○かせるくしてかせず

○おつ秘のうらと

○小便通せぬ

○大便のどく

○口かた

○少くせりくせり

是れ熱毒肺経にかまると陰気死

清涼攻毒飲
涼隔散

聶氏建中湯

利咽解毒湯
甚者
涼隔散

四順清涼飲

錢氏白朮散
加風吉

点藥
生肌散

雙豆帛囊 正編

○かせをくしてかせず

○しらんごうてのんどかせた

○さむけごうひ

○たれたるり

○唇口かたれ色紫

唇より口中かすのど死白き物生

○かたまりあり

○声たじろま

○のんどせりくせりつ死

は死肺の腫り毒集れとて

肺癰といふ病は化とて

虚寒

肺の腫と涼
毒と解と

○えりより下 數日かじらす

○後つあり

○食くくみ

○唇舌赤き

○大便通せぬ

○前症よして

○後つさく

○寐ど

○食どまぬ

○痘ゆふしてきて

ふろく穴なるせり

血がうらや
大便が通じ

脾胃と補ひ
小便と通じ

かげごうのまじ

かせ 險證

五十七

氣血怯弱津液枯
竭不能外續其毒
兼虛內入名曰倒
靨

痘發始熱毒盛者
見点之時豫解毒
而後大補氣血以
助灌膿
否則氣血虛不灌
膿故為此症候

○膿とりのび
山とあびぞ

○地をまじりひらき

○眼をまじりひらき

○痘の根の老まらぬをとり

○痘の皮色白く

○皮をむいてをまじり

痘のかせ豆がらのいぶき

氣血不豆の極

是と倒靨といふ

急補す

補す

又腫がま 吉

初痘の瘡治す初熱見点のうちにはあり
毒盛んるものこそおひが本うそのとたよ
いりて毒よむことえ氣不足一自熱と
毒とらるるよとあひさす毒ハ皮外よむびり

内攻して免すいりて初熱見
点のうちよ下割をわけて解毒したるも
補す一あつてまじりかせる
いりかたのいり

○かすの出のり

たちまじりつと黒くする

是と假收といふ

氣虛 早く補す

○えいごうち

腫まがかりてかせず

○のり

○口かた

○飲食のいどつらまて通らぬ

熱さすまらて

肺胃みどまら

急す

補中益氣湯
甚者異功散

涼隔散甘吉湯
合方加牛房子

- 口唇くどくどくする
- 唇の上下黄色くかせる
- 腹をもち
- 腹をもち
- 半豆とあぶらうごうす
- ひびきえんくう〜んすてんぐ
- 人の足さけらるゝ
- 寒けぶらひ
- たぎまの
- 膿とく〜んせ
- よまの〜ん黒ちの〜ん

- 声かまろ
- 声のでどお〜のど死
- ゆ〜ん〜んせ
- う〜ん〜んせ
- からあ〜ん
- 絶食
- 寝ぬ
- 寒熱往來ある
- 息せ〜ん〜ん
- 息ぎ〜ん
- か〜ん〜んせ〜ん
- 豆ま〜んかせ

○よろしくかきかぶつて

○かきかぶつてかきかぶつて

○かきかぶつてかきかぶつて

時候よあつてつる熱きつとめ

○かきかぶつてかきかぶつて

○えりくびのまへつ

○胸のまへ

○耳のまへうしろ

○かきかぶつてかきかぶつて

梅のまへつとめ

○かきかぶつてかきかぶつて

ひつろ野つとめ
ふつろつとめ

○かきかぶつてかきかぶつて

○白く

○蛇のぬけがらのとめ

○肌かきかぶつてかきかぶつて

○かきかぶつてかきかぶつて

○膿水うすめてかきかぶつて

○むしのかねつとめ

○初産つとめ水うすめて

○中頃つとめ

妨る
妨る
妨る

吐瀉
○死つとめ
○生つとめ

十が二三つとめ
九死一生

○初ちよより虫むしけさるる

○かきさくことびついであつる

○食くふ

○目めをさしてふくこと眠いり

○甘あまいものまきことせせ

○寒さむ熱あつかきさくは性せい本ほんと
是こゝ壞こわ志しの甚しきま

北日きたひの夜よ、
大凶

熱実者

大連堯飲

或加ま大黃だいおう或加ま硝

寒虚者

調元解毒湯

加ま多た是こゝ主しゅ

屬ま後ご加ま不落

火盛也

滑石くわくせき未ま蜜みつ水すい調てう掃そう

痂か上じやう痂か潤じゆん自じ落らく
此こゝ法ぽう霸は法ぽう不ふ得とく止し
之こゝ術じゆつ

落らく痂か須しゆ知ち

此こゝ症しやう瘰れい瘡そう治ち其こゝ一いつて自おのづかの

一いつ痘とう中ちゆう膿のうををああららううやや否いなとと考かうふふ

○十分じふぶんに膿のうををああららううて
後ご瘰れい瘡そうああららふ
虚きよ 實じつ

一いつ痘とう後ご麻ま疹しんののどどななものものああららうう 吉きち

○丹たん疹しんああららうう 吉きち
○隱いん疹しんああららうう 吉きち

一いつ禁きん物ぶつ かかせせふふああららうう

一 眼ちら痘多くりづる

かせよいにて地腫いひきしすかきさつひく
とち眼ちらんとあこたんとゆきよ眼ちら
うがふ夏もあらず止夏と得ずあこあつる
をまろつべ

眼ちら十四五日あてもあこあちち眼ちら
つらあつる滑石の粉よ蜜と水とを合せ
たびくぬべ

見点より身十二日

痘の成就せり
此の後の痘後の
餘症よして痘中
の衰よあらず

落痂頃證

は赤癩落せすと自らあ

○ 飲食常のどく

○ 大小便常のどく

○ よくあましくことひね

○ あこあちらあこ

○ 高かちあひひかち

○ 紅くちあち

○ 痘あち
八九日にして
あちあち
あちあち

頃吉

落痂險證

此症之起りにあらずば
まことべからず

○痂久しくおちぬ

○うろ高く鶏の糞のごとく

○うすく竹の中の紙のごとく

○肉へこびつておちぬ

○半こびつき半落ろりもしくも

○ふこのまろりに薄き白きまも

○ふこの色煤のろりも黒き

此證のつまず
寒熱虚实の分あり

熱実者
大連壳飲
或加大黄或加硝
寒虚者
調元解毒湯
加芍药

大連堯飲

○ 肝てふこあつぬ

餘毒あり

は赤辛き熱葉公腹へまきこて熱をこす

せきまらるり

大連堯飲

○ 一身こころぐくあつて

餘毒あり

面部あつまる

○ 發熱盛りて

餘毒盛り

大連堯飲加大黃

○ 大便通せん

○ 小便赤く多る

○ ふこ出来て

唇こまろ齒とあつぬ

急毒とあつ
血熱なきまらる
是と走馬牙疳
と云ふ

涼血攻毒飲

甚者

甘露飲

又 涼隔散大劑

○ 口疳胃熱のさつさつ

餘毒口中にとまらるり

是も輕重あり

輕者

金不換吹之

重者 内甘露飲 外靈應丹

爛入咽金不換吹之

○ 口の内外白くかまらるり

紅くあつてあつぬ

輕

○ 唇舌腫てかまらるり石のてく

重

齒くき黒くくまらるり

○ 痂の色ハかたじけなくあつぬ

○ ふこくくくくくくくくくく

死

○ 鼻へあつてあつぬ

○ 声 吐

餘毒肺經にとまらる

大連堯飲 加吉將

腫痛
涼肝明目散
後二症
風捲雲
切忌外藥

釣藤湯

○眼赤きまらむとて

解毒肝経よとせ

○赤くまらむ痛て用とあそとせらるあり

○かまらむとせえとせらるあり

○まらむとせえとせらるあり

○晴つた上り

○晴らむ

不治
不治

○たちまち頭項大痛

解毒上之のあり
恐く六日入る

是熱業と後一とせしむ

○口こそり

腹の痛臍かめぐり
ひや汗雨のてとく
但痛かめ汗せむ

風寒とせらるあり
風寒とせらるあり
血と養とせしむ

○發熱せぬとて

○頭熱して

面熱せず

○午のむら熱して

午の甲熱せぬ

○豆のひら熱して

豆の甲熱せぬ

○精神がらりとせらるあり

○大小便とせらるあり

○かみとせらるあり

又うとせらるあり

まらむとせらるあり

虚

氣血の虚

補中益氣湯

八物湯

加風荆

有寒加桂達肌表
散膜理爵伏之火

護身湯

險證

実者
大連堯飲

白者
不木補氣煎必
死

○紅紫

○紅紫

○紅き粉と吹く如く

○白く粉吹く如く

○白く雪のごとく

血熱

氣虚

氣血衰

餘毒

虚

実

○癰

虚実の分あり

癰ハ癰字の癰字と云くと訓毒の癰字

その小字に云く一氣も内子実の毒の如く
其の字に所云く一身のうちを空虚の地と
爲て表入らざるものなり

癰

○一身さるゝ小實

○熱く食

○腫物いゝ中実

實

癰

○一身さるゝ

○食まじく

○熱まじく

○腫物いゝ中虚

虚

癰

○吐瀉中実

○唇白く

○うゑ水のごとく

死

連堯飲
外心勝膏貼

八物湯
加風荆連翹

落迦逆證

此証は、
又、
又、

○とつとみまぶ

○顔の色青く

○目のつらまはらう

○たちまち大せりつたので

○か不ほううとらう

○唇舌白き

○飲みのふむせび

○のふむせび

○腹うり

○痰せりつさ

○頭あせのつ

○一病（うつりま）の（ま）む（む）の（え）ぬ（う）ち

又（ま）一病（うつりま）生（ま）じ

○神（しん）氣（き）の（ろ）と（き）ぬ（け）の（き）つ（く）

○食（じ）ま（ま）ず

○秘（ひ）じ（じ）ぬ

○う（う）の（め）づ（づ）ひ（ひ）す（す）

○お（お）の（ろ）た（ひ）く（く）

○口（くち）の（ま）と（は）ち（ち）

○う（う）の（め）づ（づ）ひ（ひ）

○胸（むね）高（たか）う（う）て（て）せ（せ）つ（つ）く（く）

○膿（う）血（ち）と（と）く（く）

死

○膿（う）血（ち）と（と）く（く）

○う（う）の（ろ）た（ひ）く（く）

○氣（き）の（り）て（て）む（む）ね（ね）と（と）く（く）

○あ（あ）の（め）づ（づ）ひ（ひ）

白（しろ）の（こ）粉（こな）が（が）た（た）ま（ま）く（く）紅（あか）の（こ）た（た）

○か（か）せ（せ）後（ご）瘡（かさ）と（と）生（な）じ（じ）と（と）す（す）

瘡（かさ）と（と）生（な）じ（じ）と（と）す（す）

○か（か）せ（せ）後（ご）

瘡（かさ）と（と）生（な）じ（じ）

内（うち）ふ（ふ）じ（じ）有（あ）り（り）

肝火熾
瀉肝散
便秘
清涼攻毒飲
方在卷末下做之

血虛者
柴胡四物湯

四物湯合道赤散
加麥門
兼与安神丸

涼血四物湯
加解毒

前方加入參

初熱のとき
○經水適断

○さびのけつあり

○精神をささるるせず

○目づつひ定りるるべ

○うらみこころなく

是は熱血室に入るといふ

血室と云ふ女の腹内は毎月の経行の

血と云ふ人おろし今経水をお

そりて血室の空虚は兼て痘熱入り

○経行後血不豆の者ハ

早く毒邪の血室に入りて毒を

○経つ寒気

○精神をささるるせず

○目づつひささるるるす

○うらみこころなく

○衣類なるで汗るる

邪血室に入る

○經水適来

是は毒火の内其しく血をささるる

但一定の時節ゆるゆる血をささるる毒解

○経行 四五日にて止らるる

熱血室に入り

血熱をささるる

十全大補湯
唇舌淡白
加熟附固陽氣
虛寒者
多附兼用

○經行とつらつらく
痘そとす

裏虚

- ひかりつらく
- 山とあげぞ
- あつとすく
- るまあろく
- ふろくふろく
- 白くふろく
- 青くからく

○崩漏

經行とつらく
此時痘患は
氣血不宣
中て痘と
ころすことあつたす

十全大補湯
加熟附三片
不則塌倒不治

○白くひらく

○月事大よ来

○痘そとす
うまといひ
色白或は
ろくろく

是壞症あり
解毒内托す

調元内托散
外用胡安酒噴之
瘡起後腫脹或於
空中再出一層痘
大吉兆
若腫滿
寒戦
交牙
喘息
手足厥冷

○解毒内托す

○痘山とあげ

○膿とゆち

吉兆

先以當飯養心湯
養心血利心竅待
其能言以十全大補
湯調之
當飯養心湯
飯地麥升甘灯草

安胎飲 孕婦出痘最
要安胎
芩朮 飯翹 縮
殼甘 腹陳

安胎飲 初熱既退
諸症平準
芩朮 芩地
當芍 編蘇
陳甘

- 腫ふくま
- せりくせり
- あふえ
- 平旦ひえこゆる
- たがまり

死

痘中ちちち
○經水よるり
にやかよ声つぎまののぬ
血と舌心臓の主なるるるぬ
血さるる心の後虚さぬる舌の絡
脈血のうらひるること舌自ら
まらぬるり

妊娠出痘

熱ら胎心動くはゆゑ自然と半産ま
半産まは血不足して痘をこら
かて膿漿とぬぬのるりゆゑ
胎と母とをさるるぬるりゆゑ
も初丁子肉桂のごとくゆゑ

參藜飲の類にて散散を

- 初熱
- 痘の後
- 別症の具

安胎飲と用ひて
胎と安んむ

○のんごかた死
くごまら

人參白朮散
かひんま

○痘白く
山あび後

十全大補湯
木香糯米を加ふ

○熱あまら
○かきつけつぐぐてく
内熱をひくまら

後つて治め
胎安んご
大黃石膏と用ふ

○痘の盛るる時
出産とまら

大い気血と補ふ
十全大補湯

勢必と気血虚と

○虚寒
○虚寒甚

前方加附子
參附の大劑

元胎の隨熱の胎と動すより生むとのいふも
元氣さうんるる胎と動さずよりて胎の
おのる血熱と誤り認て血熱とさすを
第一とすべし是全氣虚のよりるる氣を
補ふと專一とすべし

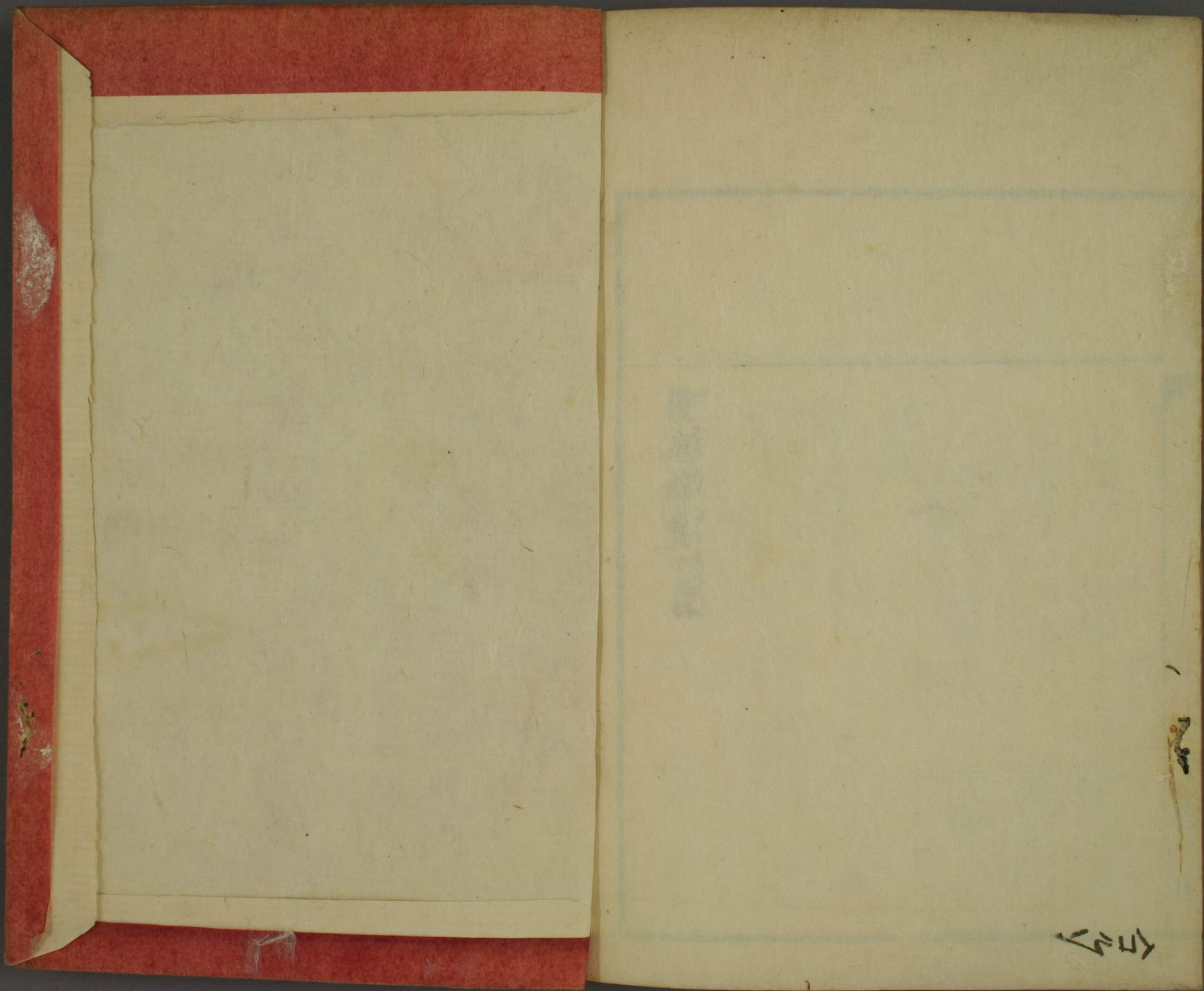
○胎墮

- 老く後
此三條の
母ハ生
- でそろひ
此條ハ
母多ハ危
- 水うみ
此條ハ
妨さ
- かせ
此條ハ

護痘錦囊

護痘錦囊 正編終

音不至齋藏



全書

